

寄稿

日本周辺におけるマンボウ類に関するアンケート調査結果

相良恒太郎, 小澤貴和[†]

Report on the Questionnaires about Molids in Japan

Koutaro SAGARA and Takakazu OZAWA[†]

The questionnaires mainly about catches of three molid fishes, *Mola mola*, *Masturus lanceolatus* and *Ranzania laevis* in Japanese waters were sent to 66 marine fisheries research stations, of which 48 were withdrawn. The most frequent catches were reported from 6 stations located between Mie Prefecture in the south and Iwate Pref. in the north along Pacific coast and from Toyama Pref. along Tsushima Current coast. The catch of *M. mola* was reported from 34 of 40 stations, and together with *M. mola*, *M. lanceolatus* from 4 and *R. laevis* from 2. The main fishing gear of molids was set net which was distributed widely around Japan. Fishing season lasted from two months to all the year round, and seemingly divided into mainly summer or winter seasons. Most of the stations reported the fishes after catch were used for food in fresh. The landing of fishes was recorded at 5 stations.

Key words: Japanese waters, molid fishes, frequency of catch, fishing seasons, catch records

はじめに

日本周辺海域にはマンボウ類としてマンボウ *Mola mola*, ヤリマンボウ *Masturus lanceolatus*, およびクサビフグ *Ranzania laevis* の3種が知られ, 全て世界中の温熱帯海域に生息する(波戸岡, 2000). その特異な体形と巨体(マンボウは体長3m, 体重2トンに達する)から漁獲されるとメディアによって報道されることも多く, 又水族館でも人気のある魚である.

マンボウ類の産卵場は北太平洋では中央水域の静止帯(14°-28°N, 142°E-147°W)にあり, 成熟個体は北太平洋環流の外側移行帯で漁獲されること(Parin, 1971), そして船上から横臥して静かに漂っているのが見られること(Matsuura and Tyler, 1998)より, マンボウ類は波任せ, 潮任せの一生を送っているものと想像されている. 一方, 長期間の水槽飼育では横臥状態は殆ど見られないこと(大分県マリンカルチャーセンター鳥島義明氏私信), 10ノット以上で遊泳して逃避する場面が観察されていることなど(宮城県水産開発センター私信), 想像外の生態的特徴も知られている. しかしながら, マンボウ類の基礎的な生物学知見は少なく, 特に成長や回遊に関しては皆無と思われる

(Matsuura and Tyler, 1998). そこで, 筆者らはマンボウ類の回遊に関する研究の手掛かりを得るため, 水産関係機関へのアンケート調査を行った.

アンケート方法と結果

アンケートは2001年5月から8月にかけて, 海面漁業にたずさわる全国67の都道府県水産関係調査・研究機関に対して郵送した. アンケート項目は漁獲状況(漁獲頻度, 魚種, 漁獲時期, 主要産地, 漁具), 利用状況(処理及び調理法), 地方名, 漁獲量の記録と報告書の有無, その他(食性等)であり, 漁獲魚種確認のため, アンケートには各魚種の形態の略図と識別的特徴を記した資料を同封した. 以上のアンケート項目について, 本報告では以下の項目に関する集計結果を報告する: 漁獲頻度; 魚種; 漁獲時期; 漁具; 処理; 地方名; 漁獲量記録の有無. 日本周辺の海域を, 沖縄県以北の太平洋域(黒潮及び親潮海域), 熊本県以北で北海道立函館水産試験場の担当海域を含む対馬暖流域, および瀬戸内海などの内海域に大別した. なお, 機関名は日本水産学会(2001)に記された略記名を用い, 分場や支場名などは略記名に続けて示した. また, 日本水産学会(2001)に記載されていない機関については, 名称全てを記した.

回答は49機関から得られたが, その中の1機関(千葉水産研究センター富津研究所)は東京湾の海苔, 貝類および漁場環境調査機関であった. それ故アンケート送付有効機

2001年12月9日受付, 2002年6月11日受理

鹿児島大学水産学部

Faculty of Fisheries, Kagoshima University, 4-50-20 Shimo-arata, Kagoshima 890-0056, Japan

[†] ozawa@fish.kagoshima-u.ac.jp

関数は66, 回答機関数は48(回答率73%)であった。漁獲頻度のアンケート内容は以下の通りである：(例えば魚市場で)普通に見かける；(例えば魚市場で)時々見かける；聞いたことがある；聞いたことがない。集計に際しては、表記した順に漁獲頻度が少ないと判断した。アンケートの回答を得た48機関の内、40機関(83%)でマンボウ類が漁獲あるいは採集されていた(Fig. 1)。漁獲を聞いたことがない8機関は日本周辺海域にほぼ万遍なく所在し、太平洋海域では沖縄水試八重山支場、対馬暖流海域では福岡水海技セ豊前海研究所、新潟県漁業振興会村上事業所、秋田水振セ、そして稚内水試、内海域では福岡水海技セ有明海研究所、岡山水試、そして愛知水試漁業生産研究所であった。最も頻繁に漁獲される機関は太平洋域の三重水技セから岩手水技セにかけての6機関と対馬暖流域の富山水試、合計7機関であった。次に漁獲の頻度が高かった機関は太平洋域の鹿児島水試から気仙沼水試までの7機関と対馬暖流域の福井水試から函館水試にかけての3機関、合計10機関であった。内海域である佐賀有明水振セや瀬戸内海5機関でも頻度は少ないが(「聞いたことがある」)、漁獲されていた。

漁獲される魚種として複数種であるとの6回答機関が含まれるが、40機関中34機関と圧倒的にマンボウが漁獲されていた(Fig. 2)。ヤリマンボウは4機関で、クサビフグは2機関で、各々マンボウと共に漁獲されていた。6機関では魚種不明であった。

マンボウは日本周辺海域で幅広くかつ高い頻度で漁獲されるが(Fig. 1)、他の2種は漁獲記録が極めて少なく、どちらの種もマンボウと共に漁獲されていた(Fig. 2)。福井県ではヤリマンボウの漁獲量はマンボウよりも少ないということだが(福井水試和田晃治氏私信)、この例からもうかがえるように、ヤリマンボウとクサビフグの漁獲量はマンボウよりも少ないと思われる。このため、以下のアンケート結果は、主としてマンボウに関するものと判断される。

マンボウ類が漁獲される漁具は、定置網、突棒、刺網(福島水試相馬支場のみ)、旋網(鹿児島水試、熊本水研セおよび鳥取水試のみ)、カギ(都水試八丈分場のみ)、一本釣り(都小笠原水産セのみ)、延縄(大分海水研セおよび都小笠原水産セのみ)、そして竹羽瀬(佐賀有明水振セのみ)などであった。これらのうち定置網での漁獲記録が最も多く、日本周辺海域に万遍なく、鹿児島水試から釧路水試までの29機関から回答を得た。都水試八丈分場と都小笠原水産セでは定置網による漁獲はなかった。突棒は太平洋域の三重水技セから岩手水技セまでの7機関から回答された。

漁獲時期に関しては太平洋域では20機関、対馬暖流域では8機関から回答があった(Fig. 3：三重県紀北県民局農林水産商工部は三重紀北農商と略)。同じ都道府県の複数機関からの回答は、例えば北海道3機関のように(釧路

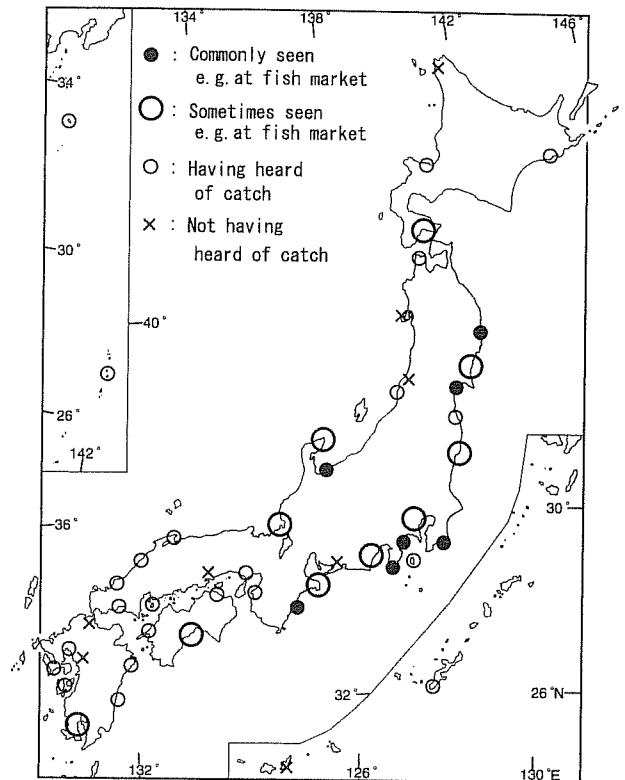


Figure 1. Frequency of catches of molids.

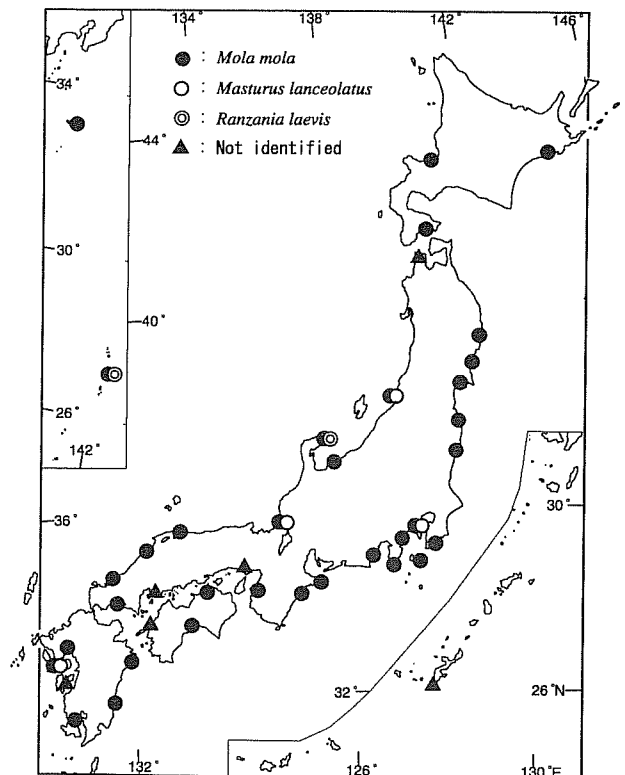


Figure 2. Molid species caught.

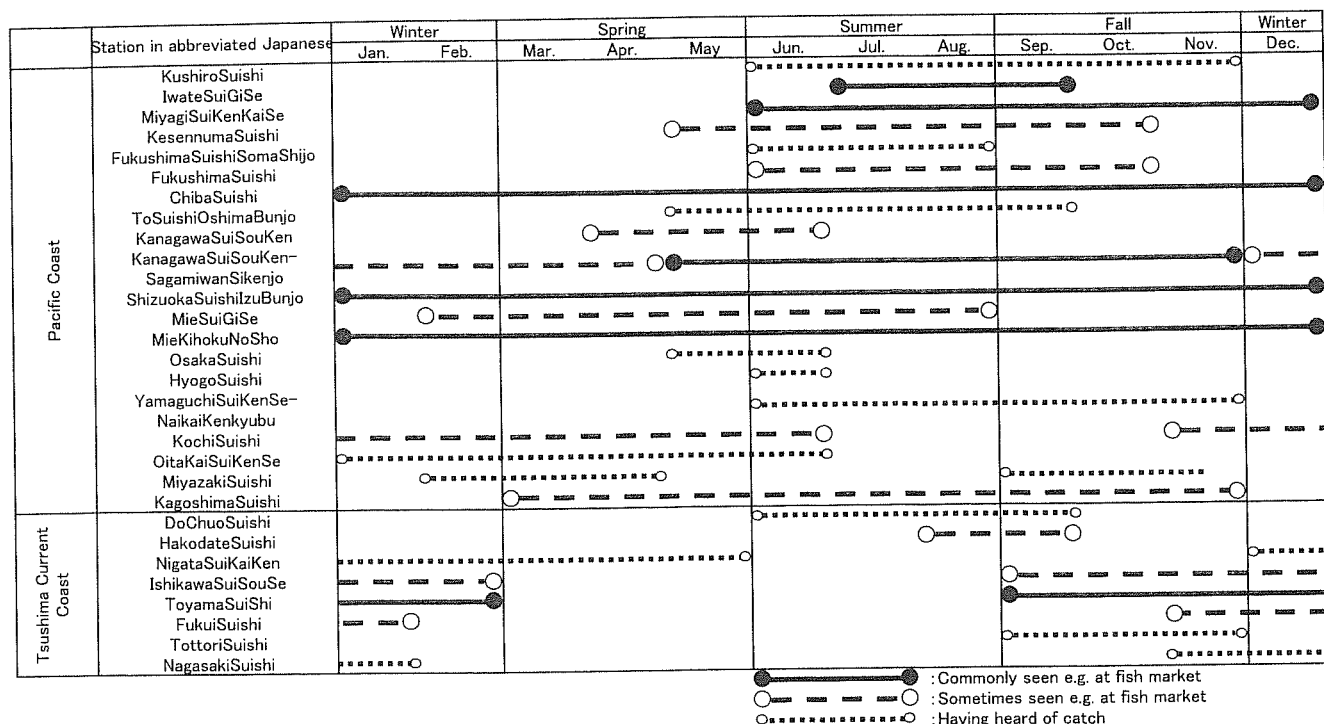


Figure 3. Fishing seasons of molids. For the abbreviation of name of stations in Japanese, refer to The Japanese Society of Fisheries Science (2001) except MieKihokuNoSho whose full name is Mieken Kihoku Kenminkyoku Norinsuisan Shokobu.

水試, 6-11月; 函館水試, 8-9月; 道中央水試, 6-9月), 漁獲時期は大きく異なる。漁獲時期は, 太平洋域では千葉水試を除く神奈川水試総研(同相模湾分場を含む)以北では盛春から初冬で, 主に夏期であった。漁獲頻度の高い千葉水試, 静岡水試伊豆分場, そして三重県紀北県民局農林水産商工部の3機関では, 漁獲が周年に亘っている。瀬戸内海の3府県(大阪水試, 兵庫水試, 山口水研セ内海研究部)では夏が中心と思われる。高知水試では11-6月, 大分海水研セでは1-6月に漁獲され, 冬と春が中心のように思われた。宮崎水試では夏に漁獲されていないが, 鹿児島水試では春から秋にかけて漁獲されていた。対馬暖流域では, 北海道の2機関では夏から秋であったが, それら以南では明らかに夏期に漁獲されず, また新潟水海研を除くと春にも漁獲されていなかった。漁獲期間は2月から4月と9月以降(終漁期不明)の2期に分断された宮崎水試を除き, 他は全て連続していた。期間の長さを漁獲頻度別に比較すると, 頻度が低下するに従って漁獲期間が短くなる傾向があり, 期間の長さの平均と範囲は「普通に見かける」では8.4ヶ月と3-12ヶ月, 「時々見かける」では5.5ヶ月と2-9ヶ月, そして「聞いたことがある」(9月以降の終漁期不明な宮崎県を除く)では3.9ヶ月と1-6ヶ月であった。

漁獲後の処理に関するアンケート内容は以下の通りである: 鮮魚として出荷; 地場消費もしくは漁業者だけで消

費; 水族館などで飼育; 逃がす; その他(記述の回答は全て「投棄」)。前2者は食用, 後3者は非食用である。非食用と回答した機関は九州の熊本水研セと大分海水研セ, そして山陰の山口水研セ外海研究部と鳥取水試の4機関のみであり, 他の30機関では食用が含まれていた。「鮮魚として出荷」との回答機関は太平洋域では高知水試から岩手水技セにかけての13機関, 対馬暖流域では福井水試から富山水試にかけての3機関であり, それらには最も漁獲頻度の高い(普通に見かける)機関(Fig. 1)の全てが含まれていた。

マンボウ類の地方名についてはマンボウに関する回答が最も多く(17機関), 道中央水試では「キナンボ」, 函館水試では「キナンボ」, 千葉水試では「マンボ」, 静岡水試伊豆分場では「カマブタ」(網代)あるいは「ホンマンボウ」(網代及び稲取), 大分海水研セでは「バーバラボー」あるいは「バラバー」と呼称され, 他では「マンボウ」であった。日本産魚名大辞典(日本魚類学会, 1981)によれば, その他にマンボウの地方名としてはウキ・ウキキ・ウキギ(東北), ユキナメ(新潟), クイザメ・クイシャメ(富山), シキリ(鹿児島)などがある。ヤリマンボウの地方名としては新潟水海研と長崎水試から回答され, いずれも「マンボウ」であった。クサビフグに関しては「ボンボイチ」の地方名があるとの石川水試からの1回答のみで

あった。日本産魚名大辞典（日本魚類学会編，1981）によれば，その他にクサビフグの地方名として富山県の「クイザメ」あるいは「クイシャメ」がある。

漁獲量は5機関（宮城水研開セ，千葉水試，神奈川水総研相模湾試験場，静岡水試伊豆分場，および福井水試）で記録されていた。

謝 辞

本報告をまとめるにあたり，アンケート調査に協力頂いた水産関係機関の皆様，マンボウ類の生態について情報を提供いただいた大分県マリンカルチャーセンター 鳥島義明氏，福井水試和田晃治氏，および宮城県水産開発センター，そして作図に協力頂いた鹿児島大学連合農学研究科鳥居聡

尚氏に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- 波戸岡清峰 (2000) マンボウ科. 日本産魚類検索 (第二版), 中坊徹次編, 東海大学出版会, 東京, p. 1435.
- Matsuura, K. and J.C. Tyler (1998) Triggerfishes & their allies. In: Encyclopedia of fishes, eds. J.R. Paxton and W.N. Eschmeyer, Academic Press, San Diego, 227-231.
- 日本魚類学会 (編) (1981) 日本産魚名大辞典. 三省堂, 東京, 834 pp.
- 日本水産学会 (2001) 日本水産学会が用いる機関名の略記. 日本誌, 67, 547-548.
- Parin, N.V. (1971) 表層魚の地理的分布の主要な特性. 太平洋の魚類 (阿部宗明・崎浦治之・油橋重遠・小山 譲共訳), ソ連科学アカデミー海洋研究所編, ラティス, 東京, 103-111.